KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「教育における笑いと人権に関する一考察」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2020-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 明石, 一朗 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/7926

「教育における笑いと人権に関する一考察」

短期大学部教授　明石　一朗

【１】はじめに

多忙を極める教育現場において「働き方改革」が声高く叫ばれる昨今、教職員に求められるものは何か、それは笑いと人権の視点に立った教育活動ではないかと思う。そう、教職員の≪やる気･根気･元気、そして陽気、暢気･･･≫の源泉は、《ユーモア精神と人権意識》である。

“すべての始まりは、彼女の笑顔。笑顔が力になり、笑顔で力を出し、笑顔で勝利した渋野日向子選手！”

これは、今年（2019年８月）のゴルフの全英女子オープン戦で樋口久子選手以来、42年ぶりに日本人としてメジャー制覇した渋野日向子選手を称賛する報道見出しである。終始笑顔でプレーする渋野選手の様子を見て、TV中継アナウンサーは「最終日最終組でティオフする選手が1番ティであんなふうにスマイルを見せ、あんなふうに観衆に手を振って歩いていくなんて、これまで見たことがない」と驚嘆した。しかもプロ転向２年目の若干20歳の彼女が笑顔で優勝したことは彼女の勝利の意味を一層深く大きくした。

笑顔は、人類共通のサインである。笑顔と笑いは親和的な人間関係の基礎であり、国や地域、人種・民族、性別等を超える「国際語」である。

ところで、なぜ、人間は笑うのだろうか。一説では、緊張関係の緩和や組織の結束を図ることや強いものを揶揄する攻撃性にあると言われるが、日本笑い学会元会長の井上宏氏（関西大学名誉教授）によれば、笑いは、元気に生きる（病気や悩みなどを自然治癒させる）ために必要で、心身の調子がおかしくなったとき、笑うことがある種の毒消しとして、健康に生きることに

貢献してきたと言う。だから、人間は太古の時代から笑ってきた。また、人間は、一人で生きているのではなく、複数の仲間の共同体の中で生きており、人間関係を調整したり、維持発展させたりするのに「笑い」が深く関係している。人間の暮らしが壊れかけたり壊れたりしたら、修復の努力をしなければならないし、緊張や対立が起こりそうなら、避ける努力もしなければならない。そのための親和作用として「笑い」が役立っている。(『笑い学のすすめ』井上宏 著　世界思想社, 2004)

【2】子どもが描く理想の教師像

教育はある意味「感情労働」である。教師と子どもとの親和的な人間関係の下で営まれる仕事だ。その意味では、笑顔で明るく元気で優しくも厳しく、誰にも公平で知的な先生が理想である。

「教え方が上手で、子どもにいろいろと任せて見守ってくれ、普段はおもしろくて、おおらかだけど、悪いことをしたらきちっと叱ってくれる先生」が人気のある先生であると、かつての教え子が言った。

以下は、≪子どもが好きな先生、ベスト５≫と≪子どもが嫌いな先生、ワースト５≫である。

≪子どもが好きな先生、ベスト５≫

① ユーモアがある
② 楽しく親しみやすい
③ 時にきびしい
④ 一緒に遊んでくれる
⑤ 教え方がうまい

≪子どもが嫌いな先生、ワースト５≫

① えこひいきをする
② 短気ですぐ怒る

③　がんこである
④　独断的である
⑤　小言をよく言う

【3】医師と教師の共通点

1920年代～1970年代前半にかけて活躍した作家の吉屋信子は、「金魚売り、買えずに囲む　子に優し」という句を残している。戦後の焼け野原で親を亡くした孤児たちが多くいた頃、金魚を買えずに囲む子＝貧しい子どもたちにやさしく接する金魚売りのおじさんの姿を詠んだ句である。優しい笑顔が広がる作品だ。教育の原点は、「笑いと人権」だと思う。「笑い」とは子どもへの愛情を込めたユーモア。微笑は人間関係におけるコミュニケーションの基礎であり、「人権」とは弱者への共感である。教育の営みは成長過程にある子どもの「人格の完成」をめざすものであり、子どもの無限の可能性を追求する「人間肯定観」が根底になければならない。

医師と教師の共通点は、①患者や子どものかけがえのない命を預かる仕事。②相互の信頼関係のもとで成立する仕事。③患者の病気も子どもの成長も必ず良くなるという確信を持つ仕事である。そして、他者との「であい」と「ふれあい」を通じてやりがいを持つ仕事である。

教育は「器に水を注ぐようなものではなく、子どもの心に灯をつけること」（ウィリアム・アーサーワード：英国教育学者）

「学ぶとは心に誠実を刻むこと。教えるとはともに希望を語ること」（ルイ・アラゴン：仏の詩人）の営みである。

【4】教育は「人間肯定」から始まる

「ダメな子どもは一人もいない」と考える。春にタンポポ、秋にコスモスの花が咲くように、一人ひとりの子どもは「個性」というかけがえのない自分を咲かせる。しかし、昨今は「学力テスト」の点数のみに関心がいき、あ

たかも点数の低い子どもは「ダメな子ども」と考えてしまう傾向が強まっている。

人間の値打ちは点数だけで測れない。大事な大事な「命」は数字のみで表わせない。個々の人間の能力には「違い」はあっても、「間違い」はない。その人ならではの「色や形や匂い」がある。教育者の東井義雄は、「子どもは星。みんなそれぞれの光をまばたきしている。やんちゃな子どもはやんちゃな光、おとなしい子どもはおとなしい光、気の早い子どもは気の早い光、ゆっくり屋さんはゆっくりの光など、天いっぱいに子どもの星を輝かせている」と語っている。　（「どの子も必ず救われる 私の家庭教育論」明治図書）

【5】教師の仕事は「子どもの笑顔を増やすこと」

子どもが好きで毎日恋人に会うような気持ちで教室に行くのが教師の姿である。信頼されている教師に共通しているのは、その教師を子どもが好きであることである。オーストリアの動物行動学者でノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツは、「人間は、自分の好きな人、しかも尊敬する人からのみ文化・伝統を受け継ぐことができるようになっている」と述べている。学校は、今日の日を輝いて生きるために学び、友だちと交わり励まし合い支え合う場である。学校は「楽校」でなければならず、「いじめ」のない、一人ひとりの子どもが光りかがやく場でなければならない。

【6】子どもの意欲を引き出す

豪華なご馳走が出されても食欲が無ければ食事は進まないように、体調と空腹が食欲源である。教育指導においても同様のことが言える。どのような学習活動も子どもの学習意欲が無かったり低ければ学びは深まらない。教師は何を教えるかということと共に子どもの学習意欲をどのように喚起するかを真剣に考えなければならない。ここにも「笑顔」と「人権意識」が重要なポイントとなる。子どもが意欲を出すときの言葉となくす時の言葉というも

のがある。

≪意欲の出る言葉≫

① 「あなたならきっと大丈夫」
② 「人それぞれやから」「あなたは、あなたのいいところがある」
③ 「先生はいつでもあなたの話を聞きます」

≪意欲をなくす言葉≫

① 「君にはムリや」
② 「勝手にしなさい」
③ 「レベルが低い」

子どもの意欲を引き出す言葉に共通していることは、《信頼・受容・寛容・希望・自信》などである。

一方、意欲を無くす言葉は、《否定・拒否・放任・軽蔑・命令》などである。

先日、コンビニでアルバイトをしている学生から、「嫌いな店長」と「好きな店長」の話を聞いた。店の棚に商品展示の計画を頼まれたAさんは、数日後にその計画書を提出した時、まず、「提出が遅いと否定され、次に商品の並べ方が悪いと説教され、最後はもう一度考え直して来いと命令されて落ち込んだ」と嫌いな店長のことを話した。反対に好きな店長は、「提出時にありがとうと初めに感謝され、次に商品の並べ方の悪いところを丁寧に説明され、最後に次はより良い計画書を作成してほしいと期待されたのでやる気が湧いた」と話した。

【7】子どもの気持ち

「わかってほしい親の気持ち」「わかってほしい子どもの気持ち」というアンケート結果がある。そこには、保護者の子どもへの率直な気持ちが書かれている。

○「息子よ、今日のテストは簡単やったと。だまされ続けて早や６年。」
○「息子よ、テストが終わるたびに本気出すからは、そろそろ賞味期限切れやで」
○「娘よ、勉強頑張ってね。聞いてるあなたは耳にたこ、言ってる私は口にたこ」
○「息子よ、テレビ見ているきみの背中とにらめっこ。勉強したら、この言葉、あと５分待ってみようと思いつつ」

また、子どもの生活について、

○「娘よ、あなたの言葉通じない。単語１つじゃ意味不明」（風呂、飯、寝る、金が親子の会話になっている現実がある）
○「息子よ、頭をつかえ。体を鍛えよ。エサはたっぷり与えてある」
○「息子よ、反抗期、反抗期と威張るんじゃないの。お母さんはもうすぐ更年期なんだから」

ほっとするようなものもある。

○「息子よ、親子の死闘は続くけど、お前はやっぱり私達の宝だ」

保護者としての子どもへのあったかい思いを伝えることは大切である。すれ違いでもいい。子どもに送信することから信頼関係が深まる。

次は、子どもが保護者にわかってほしい気持ちである。

○「母よ、テスト見せたら、何でこんなんできへんのやと、それは難しいからや。子どもの苦労を少しは知れ」
○「私の顔を見ると勉強と言う。家族のみんなよ、私の名前は勉強ではない」
○「母よ、テストの成績を見せたときも、人は人、うちはうちと言ってください。一度でいいからお願いします」
○「母よ、何々しながら勉強するなと私に言いますが、私はテレビを見ながらお菓子を食べ、その上、友達と電話で長くしゃべっているあなたの娘です」

子どもは、しっかり親の本音を見抜いている。

○「お父さんは勉強できたぞう。お前はお父さんに似ていない。と言った父よ、そんなことはない。あなたとそっくりです。そうして、すぐうそをつくところが」
○「父よ、繰り返し同じことを言うな。母よ、繰り返し同じことを聞くな」
○「母よ、いつもあの子、勉強できるのにって言うけど、ぼくがあそこの子は、小遣い多いでって言ったら、よその子は関係ないと言うけどそれはおかしい」
○「お母様方よ、小言は、さしずめ寿司ならわさび、飯がちょっとでわさびだたくさんでは、とても食えんで」

しかし、思わず涙ぐむものもある。

○「お父さん・お母さん大嫌い。でも、やっぱり大好き」
○「お母さん、嫌いと思うときがある。でも、そんな私の方がもっと嫌いです」

お父さん・お母さんを嫌いと思いながらも、しかし、思っている自分が嫌いだというのは、まさに親子の絆である。教育の根本は、子どもへの愛情である。家族も愛情だ。愛がなければ「情け」だけ、「情け」もなければ「情けない」ことになる。ビタミン「アイ（愛）」は、子どもの成長に欠かせない。「荒れる子ども」や課題を持つ子どもの共通点は、「ぼく・私のことなんか、だれも気にかけてくれない」という人間不信である。人は、見られ、認められ、あてにされ、期待されてこそ元気が出る。「ありがとう」「ご苦労さま」のひと声が、人と人とをつなぎ、場をなごませる。

「ありがとうございました」「お疲れ様でした」は、人を元気にさせる「魔法の言葉」だ。「悪魔の言葉」は、「あなたには関係ない」「こんなことも知らないの」「レベルが低い」である。

【8】愛の反対

生前、マザー・テレサが来日したとき、「愛の反対は何か」との問いに何

と答えたか。私は愛の反対は「憎しみ」や「怒り」と思ったが、彼女は「愛の反対は、無関心であり、無視することである」と言った。

八百屋の軒先にみかんが３つならんでいる。

１つめのみかんに「なんて甘いのだろう」と一週間言い続ける。２つめのみかんには「なんて酸っぱいのだろう」と言う。３つめのみかんには、何も言わずに無視し続けた。さて、どのみかんから腐ったか。正解は、「無視したみかん」だと言う。ほんとうか嘘かは定かでないが、みかんもそうであるかもしれない。

子どもも無視されること、誰も気に留めてくれないことが一番嫌いである。人権侵害は、「無視」することから始まる。その次は「陰口」や「落書き」。そして、「暴言」になり、「暴力」へとエスカレートし、最後は「命を奪う」ことになる。荒れている子どもに共通しているのは「自分のことを誰も見向きもしてくれない。かまってくれない」という訴えである。愛情の反対は無関心だ。

【9】子どもが嫌いなこと３つ

どのような時に子どもの人権意識が低められるのか。それには３つあると考える。

１つ目は、頭ごなしに否定されるとき、子どもは人権意識を曇らせる。

学校の近くにお地蔵さんが鎮座し賽銭箱が置いてあった。ある日のこと、男の子がそのお賽銭を盗ったのを見てしまった。見た以上、「アカンで、ぼく！手を開いてごらん。ほら、お金握っているやろ。それ返しなさい」と注意すると、その子は、「違う」と首を振った。「違うことあれへん。先生、見てたし、握っているお金を返しなさい」と強く促しても、その子は「違う」と言い張った。よくよく事情を聞くと次のようなことだった。

「大好きなおばあちゃんと住んでいたが、半年前におばあちゃんが病気になって入院した。それからその子は、お小遣いから１円とか、５円とか、10円とかをお賽銭として、お地蔵さんにお供えしては手を合わせて、おばあちゃ

んの病気が良くなるようにと拝んでいた。ところが、半年経った今、おばあちゃんの病気が一向に良くならない。そこでその男の子は『この地蔵さん、ひょっとしたらご利益ないん違うか』と考えて、『今までお供えしたお金は返してもらわんと損や』と、返してもらっているところだ」ということだった。子どもの行動の背景には、必ず原因がある。子どもの生活背景や実態を把握しないで子どもの行動だけを頭ごなしに、「アカン！」とか、「コラ！」と否定してしまうと子どもの心が閉じてしまう。「どうしたん？ 」、「何かあったんか？」と訊くことが人権教育のスタートと思う。話をよく聞いてくれる大人が周りにいる子どもは、人の話をよく聞く。

２つ目は、何でもかんでも他の人と比較されることである。

「お母ちゃん、算数のテスト100点やった！」と、弟が喜んでいると、お母さんが、「そう、お兄ちゃんはいつも100点やで。今度は国語も頑張りなさい」と言われると弟は元気がでない。何でもかんでも人と比較されるとしんどくなる。

以前、住んでいた家の前に前川さんの家があり、横に横田さん、後ろに後藤さんの家があった。その横の横田さんの娘さんがピアノが上手だった。私の娘がピアノを習い始めたとき、「横のＳちゃんみたいにピアノを上手に弾きなさい！」と言ってしまい余計に弾かなかったことがあった。

「ピアノを習っているし、お父さんも聴きたいな」と言えば、素直に弾いてくれたと思う。四季折々の花が咲くように、人にも「早稲も旬も晩稲も」ある。それぞれの自分の個性を認められた時に元気になる。「あなたはあなたでいいんだよ」と言われた時にホッとする。いつも「他人と同じこと」を求められると、子どもの心がしぼんでしまう。

３つ目は、家庭の揉め事である。

私が出会った子どもの中にU君という子どもがいた。ある日、

「きのう、おとうちゃんが、ういんな、いためて、たまご、やいて、ばんめし、つくってくれた。おいしかった。」（原文のママ）と、たった2行の日記を書いてきた。

私は赤ペンで

「お父ちゃんがんばって夕食を用意したんやね。お母ちゃんも喜んだやろな。」と書いた。

しかし、１週間後に大事件が起こったのである。教室の後ろに掲示している友だちの人物画の瞳のところが、青絵具で全部塗りつぶされていた。

「これは、大変なことや！」

「とにかく、みんな席に座りなさい。」と指示し、前を見ると、一人の男の子がうつむいている。その子どもがU君だった。何か様子がおかしい。もう一度よく見ると、服の袖口が青絵具で汚れていた。疑いをかけてはいけないと思いつつ、

「ちょっと先生、話があるねんけど。」と、声をかけるなり「ワァー」と、彼はその場で泣いてしまった。つい、

「何で、こんなことやったんや！」と、声を荒げてしまった。すると、

「先生に書いたやろ。」と言うのである。最初は、何を言っているのかわからなかったが、よくよく考え、あの日記を思い出した。

「ああ、あの日記か。お父ちゃんが晩ご飯をつくってくれてよかったやんか。」

「違うねん。」

「何が違うねん。」

「先生に言うてなかったけど、お母ちゃん、もう何日も前から家を飛び出して、帰って来やへんねん。」

その日の夜に、U君の家に飛んで行った。火に鍋をかけお湯を沸かしている。

家にはU君と小学２年生の妹とまだ保育所に通う幼い弟がいた。

その日、初めてU君の暮らしや気持ちが、わかった気がした。

学校で過ごす８時間の子どもの姿だけでは子ども理解は深まらない。「おはよう」と、あいさつを交わす前の８時間と「さようなら」の後の８時間、学校外の16時間の子どもの姿と暮らしに思いを寄せるのが教育なのだと、U君に教えられた。

子どもたちは、様々な「喜・怒・哀・楽」を胸に秘めて登校して来る。子

どもの言動は、様々な個別の生活事情がある。問題行動の背景を分析しないと課題解決はない。教育指導は、そのプロセスである。

学校は子どもの命を預かっている。毎朝、恋人に会うような弾んだ気持ちで教室に行くぐらいでなければ、私たちの仕事は続かないし、続けられない。「私の先生は、〇〇先生です。」と異口同音に、心から子どもたちに笑顔で言ってもらえる教師でありたい。

【10】最後に

子ども理解を深めるためには、次のような視点が重要であると考える。

・できないことをしかるより、できることを見てほめる
・行為の結果より、行いの過程を励ます
・つきっきりでなく、ある程度本人にまかせる。手を放して目離さず
・学級みんなでやる。不公平感をつくらない
・約束は言いつづけること。気分で左右しない
・子どもの心によりそうこと
・「あなたは、すばらしい」（一人の人格者として認め、常に希望を与える）
・「練習が足りなかったから失敗したかもしれない」(原因や背景を考える）
・「この絵、習字、上手やから壁にはっとくよ」（努力や良さを励ます）
・「人は、それぞれやから」（個性の違いや多様性を認める）
・「さぁ、どうしようか」（指示するより問うことで自立性を伸ばす）
・「まちがうな」より「まちがってもいいよ」（安心は、学びの必要条件）
・「～のくせに」「～らしく」より「あなた流で」（型にはめない）

学校教育の目的は、未来の「おとな」に対して、その生涯において求められる様々な役割を果たすのに必要な諸能力を身につけることであり、教育活動の全領域・全教科を通して、言語の獲得、集中と観察力の発達、知識の習得方法、他人との共同活動の経験を積むことである。学校は「笑い」と「人権」を視点として、素敵な「であい」と「ふれあい」から人間の尊厳を学ぶ

ところでなければならない。

《参考資料１》

「ネイティブアメリカンの教え」　　（作：ドロシー・ロー・ノルト）

☆　非難ばかり受けて育った子は、非難ばかりします。
☆　敵意に満ちた中で育った子は、誰とでも戦います。
☆　ひやかしを受けて育った子は、はにかみやになります。
☆　ねたみを受けて育った子は、悪いことをしているような気をもちます。
☆　心が寛大な人の中で育った子は、我慢強くなります。
☆　励ましを受けて育った子は、自信をもちます。
☆　ほめられる中で育った子は、いつも感謝することを知ります。
☆　公明正大な中で育った子は、正義感をもちます。
☆　おもいやりのある中で育った子は、信頼をもちます。
☆　人に誉められる中で育った子は、自分を大事にします。
☆　仲間の愛の中で育った子は、世界の愛を見つけます。

《参考資料２》

《毎日の基本的なこと》

≪自己チェック≫

①「わかる授業」づくりができているか？
②　子どもの気持ちをキャッチできているか？
③　美しい学習環境づくりができているか？
④　チームの一員として動けているか？
⑤　保護者と意思疎通できているか？
⑥　自ら学び続けているか？

《Q＆A》

①子どもたちに信頼される先生になるには

・子どもたちに、先生は私たちのことが好きで褒めたり、しかったりしてくれると感じさせること。そのためには、子どもたちとの約束を守る、減点主義でなく加点主義で接する、子どもたちの人権を大切にすること。そして、先輩の成功談や失敗談をたくさん聞くこと。

②一目置かれる先生になるには

・自分が得意な分野を見つけてやり続けること。どんなことでも５年も続けると「一

人前」になる。そして、とにかく動くこと。仕事の仕込みに充分時間をかけること。
・この先生には言い訳やウソがつけないと思わすこと。
③よい先生になる条件は
・子どもや他の先生に謙虚であること、人脈づくりに励むこと、いつも元気でいること。
④先生には、どんな役割がありますか
・学者→　専門的知識
・医者→　健康観察
・役者→　演じる
・易者→　見通しと暗示
・カウンセラー→　受け止める
⑤教師としての心構えは
・目標となる教師を持つ
・管理職、学年代表など、他の先生によく相談し報告する。（報告・連絡・相談）
・体調を万全にしておく
・最初の３年が、がんばりどころと肝に銘じる。・服装はTPOに合わせる
⑥授業の腕を上げるには
・自分の授業を見てもらうこと。そして、他の先生の授業を見せてもらうこと。
・授業後の講評を記録し次に生かすこと。
⑦ついチャイムが鳴っても授業を続けてしまうのですが
・授業の始まりの３分で子どもの心を引きつけることが大切。チャイムで必ず終わること。延長しても子どもたちは上の空である。
⑧ガミガミ言ってしまうのでいい方法はないでしょうか
・困ったときは子どもに聞く姿勢。教師は黙って聞き役になることも必要。
⑨板書の注意事項とは
・黒板は毎時間きれいに拭いておく。上から下に拭くこと。
・黒板拭きもきれいにしておく
・ゆっくり強く丁寧に書くこと
・視写を取り入れること
・一時間に黒板一面に書くこと（１枚の板書が原則）
・授業のはじめに教科の単元名を書くこと
・チョークの色を工夫すること（色、場所、ポイントマークなど）
・板書の内容はすべて暗記しておくこと

・筆順や誤字が無いよう気をつけること
⑩子どもに筆順間違えていると言われたら
・正しい筆順を確認するチャンス。一緒に筆順を確かめ正しい字を黒板に書くようにする。
⑪発問で使ってはいけない言葉はありますか
・できるだけ「わかりましたか？」は使わない方がいい。こう聞くと、わからなくても「はい」と応えてしまうから。「わからないところはありますか？」「わかりにくいところはありますか？」と聞くといい。
⑫テストを返すときの注意点は
・どこが間違ったのか注目させ、なるべく早く返す。間違い直しが大切である。
⑬本好きの学級にするには
・先生がまず読み聞かせをすること。学級目標を設け「読書何冊カード」などをつくるのも一つの方法。
⑭学級づくりをしていくには
・朝の会や終わりの会を充実させること。
・一人一役
・生活班をつくる
・行事の中で達成感や満足感を体得させる
・本物との出会いやふれあいを多くすること
⑮学級づくりの定石はあるか
・子どもが基本である
・担任の「こんな学級にしたい」という思いが大切
・遊び時間に子どもの本音が見える
・子ども間のトラブルは、即、解決。初期対応が命
・しんどい子どもを中心にクラスが動く
・問題が起きたときがチャンス
⑯学級開きで気をつけること
・あいさつは魔法の言葉。明るく元気に笑顔で子どもに接する
・担任の「こんな学級にしたい」という思いを伝える
・はじめの子どもたちの一日の様子を「学級たより」で保護者に知らせる
⑰学級通信を出すのは
・できるだけ出したいもの。その日の出来事をタイムリーに。子どものできたこと、

良かったことを中心に。不定期でもいい。

⑱子どもへのほめ方は

・たくさんほめること。

・シンプルにほめること。

・タイミングよく、みんなの前で具体的にほめちぎること。

⑲子どもとのコミュニケーションのとり方は

・生活日記、握手、あいさつ、遊び、室内ゲームなど

・朝の健康観察

・朝の１分間スピーチ

⑳保護者の要求やクレーム等にどう対処すればいいか

・保護者は基本的に「子どものトラブルを解決してほしい」「安心して学校生活を送らせたい」と願っている。なので、聞いてくれ、認めてくれと要求してくる。基本は「誠実に」話を聞く態度で対応すると長期化しないもの。

・初期対応が「命」。事案発生時には、「報告」「連絡」「相談」の上、家庭訪問が原則。

・たとえば「私が気づかなかったことを教えていただきありがとうございます。明日からしっかり指導できます。」「教えていただいたお陰で、学級の子どもたちもみんな助かりました。」そして、指導した結果を必ず報告すること。

㉑家庭訪問で、気をつけることは

・時間厳守で伺う。（定期訪問とタイムリーな訪問）

・子どものいいところを話す中で家庭の様子を伺う。食事時には行かないなど

㉒子どもとの人間関係づくりをどうしたらいいか

・「この先生にウソつかれへん」と思わすこと。そのためには日頃から子どもととことん関わることとその子の情報収集、分析を積み上げておくこと。

㉓掃除をサボらせないためにはどうすればいいか

・掃除の手順を示し、まずは教師がやってみること。もくもくと教師がやり続けると、そのうちにサボる子どもが少なくなる。

㉔子どものやる気を出させる方法は

・関わりのきっかけになるものをつくること。例えば、約束成就のお守りや短冊づくり。季節ごとの「独り言」コーナーを学級通信に掲載したり、行事の成功を祈ってみんなで千羽鶴やてるてる坊主をつくって楽しむことなど。タイムリーに褒めること

㉕宿題が多いと保護者から抗議があった場合の対応は

・実際に子どもの家庭学習の様子を聞いてどれだけの負担になっているかを把握する。一日の日課票をつくらせ本当にできない量なのかを聞く。できるかできないかを客観的データをもとに保護者に判断してもらう。

㉖あの子と同じ学級にしないでと保護者が言ってきたらどうすればいいか

・日頃から子どもの様子を観察把握し、どのような人間関係にあるのかをある一定期間調べ、そのデータをもとに話し合う。人間には得手不得手など個性があり自分と違う他者と協働したり切磋琢磨して成長することも伝えながら、どうしてもという場合は全体の中で配慮することも考える。ただ、基本的には個人的な都合や個別の要望を受けてクラス編成をしないことは伝え理解を求める。

㉗トラブル時に「うちの子だけが悪いのではない」と言ってきた場合

・加害者に対して、まずは事実確認を徹底し、複数の教員で指導に当たること。子どもが納得した時点で、被害者も呼び謝罪の場を設ける。その際に関係の子どもたちの脇も固めきっちり全てを伝えること。

㉘子どもに甘い親の特徴は

・「うちの子だけが悪いのか、遊びのつもりなのに大げさに学校は考えるのか、いじめられるその子本人にも問題がある」という考えの保護者であること。

・家でも頭ごなしに起こるか、愛情は物やお金を与えることと思っていること。

㉙素敵な保護者の特徴は

・何をおいても「うちの子のしたことは悪い」と両親そろって叱る親であること。

・家庭が平和的でいつも子どもに前向きな期待と愛情を注いでいること。

・善悪のけじめ、お手伝い、あいさつなど家庭内のしつけが行き届いていること。

・家庭で生活リズムが安定していること（寝起き、朝食夕飯、排便などの生活規律）

［参考文献］

・「笑い学のすすめ」 井上宏　世界思想社, 2004年

・「吉屋信子全集」 吉屋信子　朝日新聞社 1975年

・「名言集」 ウィリアム・アーサーワード　英国教育学者

・「名言集」 ルイ・アラゴン　仏の詩人

・「どの子も必ず救われる 私の家庭教育論」 東井義雄　明治図書　1983年

・「ヒトと動物」 コンラート・ローレンツ　思索社　1975年

・「生命あるすべてのものに」 マザー・テレサ　講談社　1982年